

産卵用のにわとりが今1億4千万羽いるという。昨年1年間で2千万羽増えた。採算がとれるには、卵1キロに160円を必要とするが、今は暴落して卸値はキロ115円だそうだ。テレビで10万羽規模の、四苦八苦している養鶏場の経営をとりあげていた。たぶん1経営体あたりの平均的な飼育数なのだろう。家の周りの養鶏場4軒のうち1軒がやめた。10万羽にははるかに及ばない小さい養鶏場だが、卵相場暴落のあおりではあるだろう。

家からの距離をすこし多くとると、養鶏場だらけと感じるくらい養鶏場が多い。とうぜん牝鶏を供給する、孵化場および鑑別所があることになる。その鑑別所の鑑別風景を、最近やはりテレビでとりあげていた。雄雌鑑別は養鶏の合理化の第一歩であった。鶏の雄雌がどのくらいの比率で産れてくるか知らないが、普通に考えると1対1で、この半分の比率を占める雄をできるだけ早い段階で、つまり餌を与えずに、排除しなければならない。

生ゴミなどを入れる大きな青いポリバケツに、雄のヒヨコが無雑作に素早くほうりこまれていく。ポイツ、ポイツとほうりこまれて、見る間にバケツは満杯になる。背の高いバケツの底の方のヒナはどうなっている？

テレビは平然とその満杯になるバケツを映している。そのところが怖かった。いままでたいがい雄のヒナの運命はぼやかされてきた。その段階を一步越えたようだ。用なしヒナは生ゴミ扱いということに、この番組にかかわった制作者たちは疑問をもっていない。

ひと昔前は、などという言い方はしたくないが、ヒナの運命はぼやかされていて、一応は育てて鶏肉になる、と思わされていた。それはそれで一生を全うしたことになる、それも手前勝手な話だけど、しょうがない、という感じであったのだ。だから小説とはいえ、あるいは官能を刺激する意図をもって書かれているとはいえ、次のような描写に出会うとがくぜんとして、しばらくは卵が食べられなくなる、といった具合だったのである。

「言いおすれましたが、豚の餌というのは青年会で経営している

養鶏場から届いたばかりの、孵化したての牡ビナです。白レグなどの卵用鶏の牡ビナは飼料にするほかはまったくしかたのない代物ですが、これなら馬でも牛でも喜んで食いますし、牛などではめだつて乳の出がよくなります。ボール箱の蓋をとると黄色い綿毛のかたまりのようなヒナが押しあいへしあいして鳴いていますが、このときはもう餌をかぎつけた豚が小さい凶悪な眼を光らせ、泡をふいて濡れた鼻さきを柵にこすりつけながら催促しているのです。

ボール箱を丸木にくりぬいた餌箱に落とすと、それこそあつという暇もありません。豚どもは争って鼻さきを餌箱におしこみ、柔らかい骨と肉と羽毛が生きながら噛みくだかれ、呑みこまれる、形容しようのない音が数十秒間つづいただけです。未練げにつつまわしている鼻の下からボール箱をひきずりだしてみると、箱には点々と血がつき、柔らかい綿毛がこびりついているだけで、ほんの一瞬まえまでの元気のよい、むくむくした塊りの数十羽は、当然のことながらあとかたもなくなっています。」宇能鴻一郎「西洋祈りの女」(S37、新潮：S56、中公文庫)

この他、にわとりの病気の予防、卵を多く産ませる技術、などなど1コの卵が口に入るまでにどれほどのコトが起きているか、知ったら私たちはまず卵は食べられない。肉類だってそうだ。それじゃ知らせましよう、親切に実態を教えてもらって、それで私たちはそういう卵や肉を食べなくなるか。菜食主義者になるか。そんなことはないのである。数日食べるのをひかえるだけである。

それは中には菜食主義になる人もいる。部分的に大丈夫そうな野菜や牛乳や卵や肉をつくり、購入する人もいる。しかし今圧倒的に多くの人びとが、その中に私も当然入るのだが、ときどき寒気をもよおしながら、けっこう、この肉はうまいねなどといいながら、そういう蛋白質を摂取している。自然食品派の人たちも100%防衛しているわけではない。

だいたいだれもが、悪いと知りつつ、将来ロクなことにはならない、自分はいいけど、子どもたちはどうなると思ひながら、たとえば私のところでは、卵がお1人様1パックなどと大安売りされれば、夫婦で2パック買って、もうかったねなどと単純に喜んで

である。

卵1コには、先進技術文明高度管理社会の、無に向っての、その過程は加速度的に悲惨さを加えていくだろう、構造が全てたたき込まれている。卵1コといわなくてもいい。日常生活の衣食住のどれをとってもそうである。技術文明社会が自滅するのはそれはそれでいい。問題は他の社会を道連れにすることだ。インカがほろんだという技術のレベルではすでにない。

先進技術文明高度管理社会の砂上樓閣性は、わかるつもりになればだれにもわかる。そしてわかったからといって、生活をやめるわけにはいかない。落込んだりマナジリを四六時中けっしているわけにはいかない。あいかわらず砂上樓閣に住んで喜怒哀楽の生活を送るしかないのである。堅固な土台をみつけるまでは。

それを見つけるのは偉大な誰かではなく、私たち一人一人の意志の集合体なのだが、その集合体と私との関係が今のところいくら考えてもまだ見えない。

〈水俣〉とは、そういう状況が生起、生来した原点を意味する。その遠因は〈広島・長崎〉である。このことは日本だけでなく、世界中にあてはまる。

甘蔗珠恵子さんの「まだ、まにあうなら一私の書きたいちばん長い手紙」がある。小冊子（「湧」増刊、1987. 7、3百円）になって、「大地にひれふして一人一人の方にお願ひしたい気持ちです。どうかあなたからお友だちへ、あなたの言葉をそえて手渡してくださいと。」という編集者のあとがきとともに流布している。感動する。そのことにかげ値はない。しかし一抹の、ああ、またかという思いもまわりつく。

それはどういうことかというと、「筆者は……1年前までは“原発”が原子力発電所の略称であることすら知らなかった、ごくふつうの主婦でした」という前説にあるウソである。

べつの言い方をすれば、もしこの前説がウソでなかったら、この人がどういう育ち方をしたのか大問題になる、ということだ。「だから教育が問題なのですよ」という言い方はとらない。それを認めたら子どもは自動人形になり、主体性などすっとなでしまうし、ど

うして原発の恐ろしきを受入れたかもわからなくなる。「無事なる民=無知なる民=ふつうの主婦（主夫）」という図式にこめられる自他にわたる蔑視・馴れ合い。そしてこの蔑視・馴れ合いを受入れるとモノゴトは感動的になるのである。

私も蔑視・馴れ合いの一員であるから、素直に感動する。しかしその次に髪の毛一本を通した汁粉のような感じがどこか漂う（汁粉12ヵ月、だんだん大きく甘くなる汁粉を12杯食べるとタダになる。その最後の汁粉に髪の毛一本をスッと通しておくとう剛の者も食べられないという神話）。

「そんな恐ろしいこととは知りませんでした」という告白を自他ともに、素直、かわいい、けなげと認めるところに、私たちがこたわらなければならぬ、私たちの根本的な欠陥がある、と思う。

「原発に反対か賛成かと問われれば、原発や電力会社や国家なんていうものと、心中したいとおもっていないので反対なのだけど、反対運動なんていうと、とても空しくなってしまう。運動によって、原発が停止したり、国の電力政策とかいうもの変わるなんて、とても思えないし、私たちの生活というのは、危険という尺度で見ると、もうずっと昔から、ずっとずっと追い込まれていると思う訳です」。水俣からの最近の手紙である。

不知火グループを私が始めたわけではないが、今は主催者的という立場からいえば、およそこういうふうな、今書いてきたような下地を、言わず語らずもっているような者がなんとなく集っていると思っている。1年に1ぺん顔を出す者とか、ルーズきわまりない。

知は力、一生懸命水俣のことを勉強したいという人は不向きである。この間もそういう人が来て、あきれてすぐ来なくなって、やってもいいというような意向だったので、水俣のおこしテープを送ったら、今猛烈に勉強しているからできないとテープが送り返されてきた。

88/5/12

